# 資格で開いた 未来への扉

LET'S GO TO THE NEXT STAGE



「会計系資格」でまず思い浮かぶ、日商簿記検定。3級や2級レベルの知識はビジネスパーソンの基礎となるとともに、経理に携わる人にとっては必須の知識だ。さらに1級ともなれば、より専門性の高い公認会計士試験や税理士試験への登竜門となる。

日商簿記1級合格者の古川理紗氏は「1級の合格で一気に道が拓けていきました」と話す。簿記 資格の取得をめざしたきっかけや簿記の魅力、今後の目標について話をうかがった。



## 最初は軽い気持ちで―― 日商簿記3級、2級を経て1級に挑戦

何か困ったことがあったら、この人の力を借りたい—。明るく、バイタリティにあふれる古川氏には、そんな雰囲気がただよう。彼女の人生を左右することになる簿記との出会いは、高校3年生の時だった。

「私自身は普通科に通っていましたが、情報科の友達が簿記を勉強していて、おもしろそうだなと興味を持ったのがきっかけでした。実家が会計事務所と社会保険労務士(以下、社労士)事務所を営んでいて、日頃から会計用語を多少なりとも聞いていたため、心のどこかで気になっていたのかもしれませんね。この時は、お小遣い帳の延長が簿記、くらいのイメージでしたけれど(笑)。軽い気持ちでしたが、興味を持った私は、大学進学後に簿記の勉強を始めました。独学では難しそうだったので、TACに通い、日商簿記3級に合格することができました」

3級に合格すると、より興味が湧き、一気に2級をめざす人も多いが、古川氏はいったん簿記から遠ざかってしまう。事情があって大学を1年半ほどで中退し、主に大手外食チェーンにてパートタイムで働くようになったからだ。

仕事は順調で、21歳の時、働きぶりを認められ、勤務先の店舗で時間帯責任者を任されるようになる。 その時、かつて勉強した簿記の知識をさらに深めたいと思った出来事があった。

「店舗の管理業務に関わるようになり、売上等の精算業務、人時売上高、食材ロスなどについて店長と話す機会が増えてきたのです。その時に、もっと簿記の知識を深めたら、業務に役立つかもしれないと思いました。そこで、働きながらTACの平日夜の講義に通い、日商簿記2級を取得。そのおかげで、店舗のお金の流れを詳しく把握できるようになりました」

身につけた知識もフルに活かして働いていた古川 氏は、この仕事が好きで、のちに契約社員となる。ところ が20代の後半にさしかかり、自分の将来を見つめ直す と、自分の経歴では店長までしかキャリアアップが望め ないかもしれないということが心配になってきた。

「現場の仕事や職場環境は好きでしたが、ずっと 現場で働くことになった場合、50~60歳まで続けられ るだろうか、体力的にもきつくなるし、病気にでもなっ たらどうしようと、30歳を前に一度立ち止まって、自分 と真剣に向き合いました」

考え抜いたのち、将来のステップアップのため、大



学卒業資格の取得を決意する。そして踏み出した第一歩が、2015年10月、3年次への大学編入やその先の大学院進学を視野に入れて決めた、自由が丘産能短期大学への入学だった。

「入学して半年間は、悩みに悩んだ時期でした。短 大には教育課程にいくつかのコースがあって、最初 は社労士の勉強を始めましたが、一方で税理士にも 興味がありました。社労士であれば働きながら資格 取得ができそうでしたが、税務に関する広範な知識 を問われる税理士試験を突破するには、勉強に専念 したとしても数年はかかります。悩んだ結果、最終的 に出した結論は税理士でした。税務をはじめとする専 門知識を強みとして、企業をサポートする関わり方に 魅力を感じたからです。この時、5年間で税理士をめ ざそうと自分の中で『プロジェクト』を立てたのです」

本格的な資格の勉強を心に決めた古川氏は2016 年3月、外食チェーンを退職し、短大と並行して再び TACにも通い始める。自身の『プロジェクト』を開始し て、最初のハードルが日商簿記1級だった。

税理士試験の受験資格には、短大や大学での取得単位数や日商簿記1級合格などが設けられている。古川氏は当初、短大で必要単位を取得して卒業したのち、税理士試験に挑むつもりでいた。しかし、1級に合格すれば受験資格となるため、卒業を待たずにいち早く受験できる。さらに日商簿記1級は、税理士試験の会計科目「簿記論」「財務諸表論」と試験範囲が重なるところが多く、効率的な学習にもつながる。こうした点に着目して、まずは日商簿記1級の合格をめざした。



## 1級合格後、税理士試験へ 「簿記論」「財務諸表論」に同時合格

日商簿記1級の出題区分は「商業簿記・会計学」と

「工業簿記・原価計算」だ。このうち、計算方法が多岐にわたり、複雑な計算を伴う「工業簿記・原価計算」に苦しむ受験生は多いが、古川氏の場合は順調だった。

「外食チェーンで働いていた時に、月次の店舗管理表(試算表)の推移分析に携わった経験が活きました。もちろん、1級は2級以上に難しくなりますが、イメージも湧きやすく、実務で役立つことがわかっていたので、勉強にも身が入りました。反対に、苦戦したのは商業簿記の財務会計の分野。例えば、連結会計は複雑で……。役立ったのは、TACの教材『合格テキスト』に載っている『設例』でした。基本問題にあたるこの部分を、連結会計を扱う講義に臨む前には必ず、すべてを読み込むようにしていました。全体像をつかんでから受講することで、木を見て森を見ず、とならずに理解を深めることができました」

他にも、克服したい論点を決めて集中的に取り組むなど、自分なりの工夫を積み重ねた。そうした努力が実り、2016年11月に日商簿記1級に挑戦して、合格を果たす。

「点数としてはギリギリでした。受験後の手応えもそこまでなかったですね。ダメだったら2月の全経簿記上級に合格すれば、同じく税理士試験の受験資格を得られるので、そちらも受験しようと対策を進めていたほどです。今振り返ると、合格できたのは、心の中で悲鳴を上げながらもがんばった最後の追い込みや、先生方の指導、答案練習、教材のおかげですね」

日商簿記1級の合格は、5年間で税理士試験を突破できるかどうかのバロメーターとなったようだ。「自分で立てた『プロジェクト』が現実味を帯びました」。 これを弾みとして、2017年8月には税理士試験の会



計科目「簿記論」 「財務諸表論」 に挑戦。どちらも 合格率10%程度 の試験だが、2科 目同時合格を成 し遂げた。

「時間的な余 裕が十分にあっ たわけではない 中でも合格でき たのは、なんと いっても日商簿 記1級を勉強してきた積み重ねが大きかったと思います。時期をあけずに受験したことも功を奏し、日商簿記1級の出題範囲には重ならない税理士試験独自の部分を重点的に勉強したり、インプットに負荷がかかる財務諸表論の理論問題の対策に時間を使えたりと、戦略的に学習を進められました」

税理士試験は、前述の会計科目2科目に加えて、 税法科目9科目の中から3科目を選択して受験する。 科目合格制度をとっており、一度合格した科目は生 涯有効となる。そして、計5科目をパスすれば、晴れ て合格だ。

当時、TACの講義と短大の授業、そして実家の事務所で経理などの仕事を抱える多忙な毎日だったという。それなのに自分で立てた計画を着々とこなした彼女は「スケジュール管理は士業では大切なことですし、楽観的なほうなので」と笑いつつも、学習中の心境をこう話す。

「試験の合否を気にする気持ちはありますが、あまりかまえ過ぎず、前向きに取り組むことが大事。勉強って、『難しいな』とネガティブにとらえると、手が止まってしまいがちです。ある程度気楽に、といったらおかしいかもしれませんが(笑)、余裕を持って取り組むことが必要だと思います。自分にはできないと思ったら、何もできませんし。とはいえ、挑戦すると決めた以上、合格に向けて、今できることをできる範囲で続けていく。問題にぶつかれば、その時に計画を立て直す。そうやって取り組んできました」

# 自分で決めた5年間は勉強に集中 クライアントと一緒に考えていく仕事をしたい

税理士をめざし始めて2年が経った2018年4月から、古川氏はそれまでとは違う環境に身を置いている。 明治大学専門職大学院に進学し、会計・監査・会 社法・税務に関して幅広く学ぶとともに、「組織再編 税制」をテーマに研究を進めているのだ。実は、大学 院進学の際にも、日商簿記1級の合格が大きく役に 立った。

「大学院入試を受けるには、一般的には大学卒業が 条件になりますが、私の場合は短大卒業と日商簿記1 級合格で、受験資格を個人的に認めてもらうことができたのです。入試も財務会計と管理会計の筆記試験が免除となり、小論文と面接のみで突破できました」

現在、税理士試験に向けては、税法科目のうち

「法人税法」の学習を最後によれる。それには外の税はにいる。5年間に、税を有理ないたをには、必要をがいる。方面を利理を対けるできるだけがありだ。



「税理士は、監

査に携わる公認会計士とは立場が異なり、クライアントとの距離感が近いといえます。税務は会社経営の重要な側面です。例えば、利益に対してかかる法人税をコストとして考えれば、額として大きいものがあります。仮に、適正な額以上の税金を納めていた場合などは、それにより会社が思うように舵を切れなくなってビジネスチャンスを失うこともあり得ます。専門知識を活かし、クライアントの企業に寄り添い、一緒に考えていける仕事ができたらいいですね」

本音をいえば、上場企業の税務を扱う税理士法人に興味があるという。

「チャンスがあれば、外食産業に携われたらいいな、と。外食チェーンで働いていたからこそ簿記の実用性に触れることができて、税理士をめざすきっかけにもなりました。お世話になった気持ちが強いので、恩返しができたらなと考えています。振り返ってみると、こうしたキャリアプランを描けるようになったのは、日商簿記1級に合格したからこそですね。1級の合格は、夢への道を切り開いてくれる特急券だったのかなと思います。合格して、特急列車に乗ったかのように、一気に道が拓けていきました」

人生の道筋をつけてくれた簿記に対して、古川氏は強い思い入れがある。現在、自身の勉強に励むかたわら、都内の大学で週1回、1・2年生向けに簿記論の授業でティーチングアシスタントとしても指導にあたる。簿記の魅力とは何か――。

「私は簿記を学び、世の中の見え方が変わりました。 受け持つ授業では、講師と一緒に、できるだけ身近な ものに例えて、若い人がイメージしやすい説明を心が けています。最初はとっつきにくいかもしれません。で も、勉強すると親近感が湧き、社会のしくみが見えてき ます。それが簿記の魅力です。ビジネスパーソンにとっても、日商簿記2級レベルの簿記や会計の知識があれば、ビジネスを俯瞰して見ることができるので、仕事にも活かせるのではないでしょうか。簿記は職種や年齢を問わず、ぜひ挑戦してほしい資格です」

### **Profile**

# 古川 理紗(ふるかわ りさ)

1987年7月生まれ。千葉県出身。大学を中退したのち、勤務先の大手外食チェーンで時間帯責任者を任されるようになると、簿記の知識を駆使して店舗管理に手腕を発揮。税理士をめざすために前職を退職したのち、2016年11月、日商簿記1級に合格。2017年8月、税理士試験「簿記論」「財務諸表論」に科目合格。現在、明治大学専門職大学院会計専門職研究科税務専修コース在学中。

#### 2008年 ♦ 21歳

日商簿記2級に合格。身につけた知識を店舗管理の業務に活かす。

#### 2015年 ♦ 28歳

10月、大学卒業資格取得を決意し、3年次への大学編入を視野に入れ、自由が丘産能短期大学に入学。

#### 2016年 ♦ 28歳

3月、5年間で税理士試験を突破する計画を立て、前職の退職を決断。日商簿記1級の合格を最初の目標に、

#### 2016年

11月、日商簿記1級に合格。5年間 で税理士試験を突破する計画が現 実味を帯びる。

#### 2017年 ♦ 30歳

29歳

8月、税理士試験「簿記論」「財務諸 表論」に科目合格。以後、税法科目 の学習に取り組む。

#### 2018年 ♦ 30歳

4月、明治大学専門職大学院 会計専門職研究科 税務専修コースに入学。 現在、自身の勉強のかたわら、大学の 簿記論の授業で講師補助に携わる。